Titibu861

秩父平成１７年正月号　８６号

航空百日祭作詞者

梅岡信明大尉

作詞者
梅岡信明大尉
（55 期）

前号において「航空百日祭」の作曲者５５ 期の家弓正矢様に本軍歌を作曲した経緯に就いてご執筆をお願いしました。作者の梅岡信明（55 期）様についてもご紹介したいのですが、残念ながら梅岡様は戦争末期仏印南方洋上で戦死を遂げられましたので、55 期戦死者の追悼録『烈星の頌』巻４に収録された橋田正道様の追悼記を掲載いたします。（編集子注）

橋田正道　55 期（航空・操縦）記

若き赤誠の発露として我々同期生は勿論多くの後輩の方々が愛唱してやまない軍歌、航空百日祭の作詩者梅岡君を偲びたい。

昭和 20 年２月日本本土侵攻の米艦隊に合流すべくセイロン基地を出た英機動部隊は、パレンバン油田ならびに航空基地を前後２回にわたって空襲した。既に敵編隊群は我が電探が捕捉して其の侵攻状況は時々刻々報告され、各戦闘隊は夫々周辺基地を離陸して指定の空域に待機を完了していた。「〇〇戦隊高度五〇〇〇」頼母しい無電が当時私が勤務していた師団作戦室に入る。「敵発見〇〇戦隊攻撃」力強い戦隊長命令が手にとるように傍受出来る。高射砲三ケ聯隊は砲口も裂けと射ち続ける。真に壮烈痛快な迎撃戦闘であった。油田、飛行場共に大した被害もなく鮮かな要地防空戦闘であった。その戦闘に梅岡君(大尉 23 才)は第 26 戦隊飛行隊長として陣頭に立ち、編隊群を率いて勇戦し数機撃墜の偉勲をたてたが、自からも被弾(操縦桿?)不時着したと同隊の進藤中尉から聞かされた。

しかし本人はそれを誇るでもなく唯例の人懐っこい微笑で答えていたのを思い出す。すべてについて彼は手柄話をしない男だった。航空百日祭の作詩者が長年不明であったのも彼の人柄をよく示しているようだ。

間もなく彼の戦隊は昭南(シンガポール)防空に転じ、捷一号作戦下命されるや南方軍の精鋭として本土決戦に馳せ参ずべく急遽集結中、無念にも昭和 20 年７仏印南方海上に墜落死を遂げるに至った。航空隊の常として別れは簡単なものであった。「おいシンガポールに行くぞ」「そうか、元気でやれよ。」又何時でも会える気軽さであったが既に特攻攻撃も始まり、いよいよ戦局は苛烈でお互に良き死所を得たいとの思いが言外にあったのを思い出す。

御家族の願いをこめられた立派なお墓が松山市道後の石手寺境内にあり、弟さん妹さんが松山市にお住いである。

遺骨なき墓は大空に散る航空兵の常であり本懐でもありましょう。彼とその勲は在

校中に作った名歌と共に永く人々の心の中に生き続けることを確信します。〈烈星の頌（巻４）７２頁より転載〉

編集子補足
「航空百日祭」に関連する記事が歌詞、音符とともに『陸軍航空士官学校』陸軍航空士官学校史刊行会平成１８年発行に掲載されている（１６０～１６２頁）。その主なものを次に紹介する。

「航空百日祭の歌」

士官学校には、古くから卒業前百日目を祝う百日祭の伝統があった。厳めしい士官学校生活の大半を終え、あと百日で卒業を迎えるこの日は、士官候補生たちにとっては格別の感慨を呼ぶ日であった。このため、百日祭の歌は数多くあったが航空兵科独自のものはなかった。

第５５期生では、「航空百日祭」の歌を作ろうということになった。今も歌い継がれる航空百日祭の歌は、昭和１６年９月、梅岡信明候補生（操縦）の作詞であり、家弓正矢候補生（整備）の作曲である。詩情あふれる歌詞と悠揚迫らぬ曲は、同期生の間に好評であり、たちまちの間に下級生にも定着していった。

「軍歌演習のテンポについて」：家弓正矢（５５期）

予科から航士に移ってビックリしたのは、古兵の軍歌演習の悠長さ。営内靴でゾロゾロ引きずるような歌い振りは毎分１１４歩のテンポに馴れた耳には何とも魅力的であった。…私の作曲した「航空百日祭」も、遅いテンポに合ってしまった。…

「ある航空百日祭」：小川晴志（５６期）　昭和１７年の春、同室で起居を共にていた５５期の先輩（当時５５期と５６期が同じ寝室に片側ずつ向かい合って並んでいた）の誘いに乗って、扇町屋の料理屋で日曜の真っ昼間から飲めよ歌えよの「航空百日祭」に参加し、浦中直市中隊長（４３期）に大目玉を食らった筆者の思い出が綴られている。

まだ、よき時代であった。